1	
言語	言葉の力をつけよう（音読３年③） 〔歌物語「伊勢物語」〕
名前	

和歌を収めた歌集には、和歌だけでなく和歌の詠まれた状況を簡単に説明する文章が、和歌の直前に書かれています。これを「詞書」といいます。この「詞書」が物語のように詳しく書かれたものを「歌物語」と言います。代表作の『伊勢物語』を読んで「歌物語」を楽しみましょう。

やってみよう

「から衣」の和歌は、表現の工夫がたくさんしてある技巧的な歌であると同時に、登場人物の心情を見事に表現して物語をまとめ上げる歌です。物語の中におり込まれる和歌のすばらしさを感じて音読しましょう。

《解説》

「東下り」と呼ばれるこの章段は、自分を都では役に立たない男だと思い込んだ男が、友人の何人かといっしょに、東国のほうに自分たちの住めるところを探して旅をしたことを書いたものです。慣れない長旅に苦労しながら、都から遠く離れた三河の国にたどり着いて、一休みしたその沢に咲いていた 注1かきつばたにちなんで、折句（和歌の各句の初めに物の名を一字ずつ置いて詠む技法）を使った歌を詠みます。その詠んだ歌は、折句の他たくさんの表現技法を使って、都を遠く離れてきてしまったことを振り返り、旅のつらさ、わびしさを詠んだ歌でした。

昔、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の陰におりゐて乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める

から衣　きつつなれにし　つましあれば
はるばるきぬる　たびをしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人乾飯の上に涙落としてほとびにけり。

注1　かきつばた…アヤメ科の植物。水辺に生え、夏に紫や白の花を付ける。
注2　乾飯…炊いた飯を乾燥させたもの。水でもどして食べる。

《読んだ回数》

1回	2回	3回	4回	5回	何度も	合計　回

朗読　暗唱